

X 成果と問題点

1. 「ユカンボシ」の呼称について

遺跡名称にも使われている「ユカンボシ」の地名解釈で、現在広く引用されているのは長見義三の説である。これはアイヌ語の「yuk-ampa-usi」と解き、「シカ・がたくさんいる・所」と説明するものである。長見はさらに、「…往昔、この川辺の大湿原にシカが春から夏に濃い群れをなしていたのだろう。…」と付け足している（1976年『ちとせ地名散歩』）。また、『増補千歳市史』では「yuk-kam-pu-us-i」[シカ・肉・庫・多い・所]と解してある（1983年）。

しかしながら、松浦武四郎のものをはじめとするいくつかの地図、地名辞典をみても「シカ・がたくさんいる・所」という説明はもっとも新しく表出された長見のものにしかなく、さらに北海道の全体にわたるアイヌ語地名においても同音、同形、同意の地名は見いだしがたく、納得しがたい。

ここでは「ユカンボシ」に相当する地名表記のみられる記録、地図、地名辞典類のいくつかを、年代の新しいものから順にならべ異（古）称を示すなかで、本来的な語はどのようなものと推定できるかについて記しておきたい。

なお現在ユカンボシと呼ばれる地名はユカンボシ川のみである。この川は、恵庭公園の西端付近に源泉があり、ほぼ6kmほど東に流れ、河川改修の結果今では市道「南24号」が「長都川」と交差するところで合流している。自然状態では、例えば100年ほど昔は、オサツ沼の西の広がりの中に直接流れ込んでいた。つまり、河口部は沼の一部であった。あるいは水位がいくぶん低下すると、ユカンボシ C 15遺跡の中央部を北へ抜け、大きく東に曲がりオサツ川に合流していたものとみなされる。

「ユカンボシ」地名の初出は、1920年（大正9年）の「大日本帝国陸地測量部」発行の5万分の1地形図『漁』（いざり）である（図Ⅰ－3上）。これでは「ユカンボシ川」の名称となっており、中流域には「ユカンボシ」の地名も描き込んである。以後5万分の1地形図では、1936年（昭和11年）も、現在も川の名称は「ユカンボシ」である。1936年（昭和11年）の地形図（図Ⅰ－3下）にも川と鉄道が交差するあたりに「ユカンボシ」の地名があるが、ここらは現在では「戸磯」（といそ）に変わっている。

さて5万分の1地形図で古いものはどのようになっているかというと、1910年（明治43年）「陸地測量部」発行の『漁』（いざり）には、「イカンボシ川」があり上流部には「イカンボシ」の地名もみられる（図Ⅰ－2下）。さらに古いのは1896年（明治29年）「陸地測量部」製版の「北海道假製五万分之一図」『長都』（おさつ）である。これは「假製」という制約もあって、湖岸線や河川に比べて山地形の表示は概略的なものである。行政の区画として、右下に「千歳（チトセ）村」、左端に「漁（イザリ）村」、中央部に「長都（オサツ）村」が表示してある。この図の地名表記はアイヌ語を片仮名・漢字で写したものばかりである。「長都（オサツ）村」のなかに、川に沿うように「エカンプウシ」の表示がある（図Ⅰ－2上）。

この「假製五万分之一図」と兄弟のような関係にある1894年（明治27）年3月、北海道庁『胆振国千歳郡千歳原野区画図』（25000分の1）（恵庭市郷土資料館蔵）ではユカンボシ川と「オサツ川」との合流地点は明瞭ではないが、この図には中流部分に川に沿って「エカンプウシ」の表記がある。

それでは永田方正『北海道蝦夷語地名解』（初版明治24年；1891年）の復刻版（1984年）ではどのようになっているのか。残念ながら、ここで話題にしている「胆振国千歳郡」の地名では「オサツ」はあるが「ユカンボシ」に相当するものは見あたらない。巻末の折り込み地図でも「オサツ」はあるが「ユカンボシ」に相当するものはない。そのような小さな地名であったということであろう。ある

1. 「ユカンボシ」の呼称について

いは交通路が河川から陸上に変わりつつあり、その重要性が低下していたのかもしれない。

つぎには松浦武四郎の諸記録に目を通して置く。

『丁巳第十五巻由宇発利日誌』では「ヲサツ、此处に鮭番屋一棟有。其処よりチトセ並にイサリフトえ歩行道有るよし也。当時ユウハリ蝦夷八軒、……。扱此处より少し上がりて右の方小川有。字イカンフレと云よし也。……。」とある。この「イカンフレ」には「イカンヘツ」の注釈がある。

『戊午日誌第三十三巻東西新道誌』では「イカンブシ」について「小川にして皆礁砂也。急流。其名義、久敷振にて対面して喜びしと云義。イカンフの訛りなるよし。…」と説明してある。これは1858年（安政5年）夏に現在の国道36号にほぼ近い道筋を西から東へ歩いた時のものであり、道路と川とが交わるあたりでの伝聞なのである。このなかで「新道」という表現をしているのは、その前年に幅2間で開削、改修なされたことの反映である。この『戊午新道日誌』の地図部分では「イカンボシ」とある。なお、『午十番手控』には「ヘカンブシ」と書いてあるという。

松浦武四郎と前後する時期の記録である『入北記』（玉蟲左太夫、安政4年の見聞録。1992年稲葉一郎解説）では、松浦武四郎が「新道」と記した道筋を、武四郎とは逆方向に進んで、千歳から島松へむかうなかで（9月9日）「……イカンブシト云フ処ニ至リ、小憩所アリ……」とみえる。この帰路（12日）は「……（島松から2里半で）イカンフシニテ小憩ス。……」とある。

1822年頃（文政5年）の間宮林蔵の地図と伝えられている『蝦夷全図』は内陸の河川湖沼など詳細なものである。尺があまりにも大きすぎて地名が読みとれないが、地名に関しては、部分拡大図とでもいえるものが小林和夫作成で示してある。この小林の付録地名図には「ヲサツ」の西隣に「井カンブシ」が描いてある。そして、この地図では「井カンブシ」川は直接沼に注いでいる。

1821年頃（文政4年）の伊能忠敬『蝦夷国測量図』は、詳細な図であるが、内陸は河川湖沼の記入がなく、地名が少ない。さいわい勇払、石狩間の山道の書き込みがあり、千歳、恵庭あたりは詳しいのだが、ここで話題にしている部分の地名は読み取れない。

以上のような呼称を古いものから並べると次のようになる。「井カンブシ」「イカンブシ」「イカンフ」「ヘカンブシ」「イカンボシ」「イカンフレ」「イカンヘツ」「エカンブウシ」「イカンボシ」「ユカンボシ」。これを見ると、話す方、聞く方、書く人、読む人ともに「○カン○○」は共通している。そしてこれらの語が川の名称であることは、一貫している。地名の意味（語義）は松浦武四郎の「イカンブシ」「久敷振にて対面して喜びしと云義。」しか伝わっていない。

呼称の変遷をたどると「ユカンボシ」は和語変称の結果であって、もっとも新しいものである。したがって、「鹿」に関連するものとはみなしがたい。地名の意味がすっかり失われ、川の名称にもかかわらず川のどのような特色でもって（地形、特産物）呼んだのかが明らかでない。つまり地名の発祥地とでもいうべきものが不明瞭なのである。「○カン○○」の語形から思いつくのは「ペカンベウシ」である。しかし、「ユカンボシ」と呼ばれている地名のもとというには、「ペカンペ（ヒシ）の成育しうる地形条件」の吟味、P音の脱落の説明、伝承語義との連絡などに別途説明が必要である。

（西田 茂）

引用、参考文献

- 松浦武四郎著、高倉新一郎校訂、秋葉実解説 1982年 『丁巳東西蝦夷山川地理取調日誌』 下
松浦武四郎著、高倉新一郎校訂、秋葉実解説 1985年 『戊午東西蝦夷山川地理取調日誌』 中
高倉新一郎編著 1987年 『北海道古地図集成』
佐々木利和編 1988年 『アイヌ語地名資料集成』